

日蓮聖人遺文の国語学的研究メモ

春日正三

毎週一回学生達と一緒に、日蓮聖人の遺文を読んでいる。作業は、タイトルとして掲げた立派な研究題目であるが、実際は、判読しにくい文字を読み、その文字とことばの由来を尋ねながら鎌倉期の国語を知ることということに過ぎないが。

ご遺文の国語史としての資料的価値については、神戸大学の島田英雄先生が述べられておられるので、私がここでくり返す必要はないかろう。が、その価値に比して研究されていないのが現実だと思われる。

国語の音節「N」は、音声学的には次に続く子音・または母音によって、m・n・n・n・r・lとに区別される。中古に入って発生し、漢字音の三内鼻音を表記するム・ニ・イ・ウや・ン・ンなどの符号・それにゼロ記号で古くは表記している。

論語十卷・千字文一卷(記)
ロニゴトマキ セニジモニヒトマキ

フツ(てけ) ちん(つんだる) (土佐) がある。

悉曇学の影響でできたとも、漢字音の反切でできたともいわれる「五十音図」に、ン・ンが見られないのは、音図の性格と、成立年代によるのであるが、とにかく鼻に抜けるこの音は、当時の中央語としてあまり品のよいものではなく、その結果が、和語には好まれていない。漢字音とのつながりから、訓点語に多く使われている。

次の写真文は、聖人が富城殿女房尼御前に宛てた、弘安二年十一月(聖人五八歳)の御書である。

いよ房は学生になりて候ぞ
ね／に法門きかせ給候へ
はるかにみまいせ／候はねハをばつかな
く候／たうしとてもたのし／き事ハ候ハ

ねどもむかしハ／ことにわびしく候し時
よりやしなわれまい／らせて候へハこと
にをん／をもくをもひまいせ候／それに
ついてハいのちハつ／るかめのごとくさ
いまいハ／月のまさりしをのみつが／ご
とくこそ法花経にハ／いのりまいせ候へ
／さてハにち後房しもつけ房／と申僧を
いよとのにつけて／候ぞしばらくふびん
にあ／たらせ給へとき殿にハ／申させ
給候へ

十一月廿五日

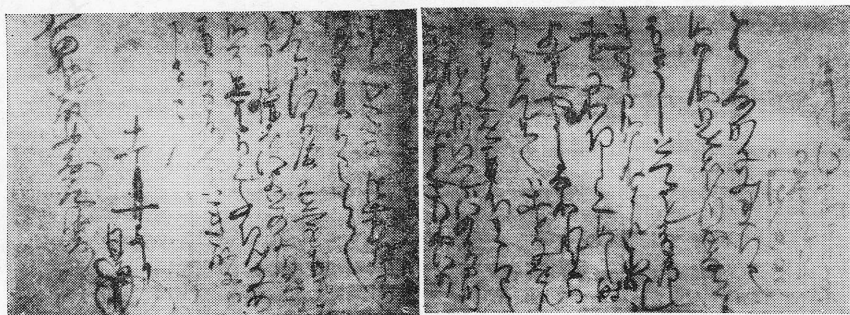
日蓮花押

富城殿女房尼御前

真筆は全三紙が小湊誕生寺に現存している。

宛名の「富城」とあるのも、弘安二年以後の消息であることを証している。宛名の文字が、ときどの・土木殿・富木殿・富城殿と変わることによって、年代が推定できる。

本文「候ハねとも」「をん」「ふびん」の「ん」(16)がちよっと見たところでは、同じに見える。しかしよく気をつけると前者と後者二つの形は異形であることがわかる。すなわち、前者は「打消助動詞已然形に接続した逆接確定条件の接続助詞・ども」と判定でき、後者ははねる音「ん」であろう。国語表



記の「ん」は中古の中期から末期にかけて成立を見るのであるから、ここに表記されていても何もおかしくはないが、この両形の文字を少々調査したので報告する。

	兄弟抄 文永二年(44)		千日尼御書(59)	
ん	12		14	
ん	1		3	
とん	4		4	
とん	10		14	

「ん」の方は、大体よろしい。「いかんか」の場合でも「いかん」となっている。従って字源の「无」となるが、「とも・ども」の場合に、表が示す通りとなり、字源・字形からは「とん・とも」が決し難い。継色紙・高野切第一種・同第二種・関戸本古今集・本阿弥切・行成筆十番歌合・曼殊院古今等の資料によると、「ん・む・ん・も」も、ともに「无」を使っている。ただ「本阿弥切」だけが、「ん」は「ん」・「も」は「も」となっている。従って現在の段の調査と資料とは何とも言い難いが、「とん」とは読まずに(1)動詞型活用語の終止形・形容詞型活用語の連用形に接続した場合には、どちらの字形をとっても「とも」と読む。(慣用表記である)

(2)活用語の已然形に接続した場合には、「ども」と読む。(慣用表記である)
(3) (1)以外に、語中、語尾の場合には「ん」と読む。ときには「む」とも読む。といえよう。

「随喜居士謹集日蓮大聖人御真蹟対照録」に表記された「とん」ならば、前時代・もしくは同時代に同形を持つ語があってもよからうと思うのであるが、現在のところ見当らない。

千日尼御書には、「も入て」が二箇所ある。将来の課題となる。

最後に、語義通りの「心情を吐き出した」「思想が先に来て、文字が後からついていった」文章や文字が、聖人の強い個性として表われている。その為に一見難解・難読のように見える文章や文字でも、こうしていいねいに読んでいくと、ていねいに、推敲された跡が見受けられる。たとえば「いなし」と書いて、そのうえから墨を濃くされて「むなし」とされたり、「……の中に」をうえから同じように墨を濃くして「……の内に」と直されている。ただ難しいのは、このような性格の作品の、専門用語の正しい読み方である。仏典から呉音・漢音だから漢音というわけにはいかない。わずかな体験では、このことが一番難しいといえそうである。今後の精進を誓いながら筆をおく。ご叱正をこころ。